

道草を食う



河原 多恵子 (かわはら たえこ)
アナウンサー

岩見沢市生まれ。北海道女子短期大学体育科を卒業し、北海道放送(株)へアナウンサーとして入社、以降、数々の番組を担当。ラジオ制作プロデューサーを経て、現在は、HBC-R「多恵子の今夜もふたり言 (月～木23:30～24:00)」パーソナリティー。番組では毎週様々な分野からゲストを迎えてインタビュー。大人のトーク番組として聞かれている。趣味は運転・旅・本、街歩き、美術館めぐり。画家・片岡球子のファン。

子どもの頃、「道草食わないで行きなさい」と、大人からよく言われたものです。でも、草むらでは四つ葉のクローバーを探し、花を摘んで首飾りを編み、虫や蟻を見つけ観察する。缶けりやゴム跳びもする。道草は、大勢でいてもひとりだけでも魅力的な時間で、その習慣は抜けず、いまま道草や寄り道が大好きです。小路や脇道、書店や酒場、国内外を東奔西走、ジグザグ歩きを満喫しています。

道草を食う

最近、読んでいる『美しい日本語の辞典 (小学館)』は、後世に伝えたい美しい言葉や表現を集めたもの。それによれば、「道草を食う」とは、「目的地に行く途中で他のことに時間を費やす。もと、馬が道端の草を食って進行が遅くなること」とあります。例えば、十返舎一九が書いた滑稽本、『東海道中膝栗毛』に登場する弥次さん喜多さんの道中も、宿場や茶店、遊郭などで長居してしまうので、お伊勢参りもなかなか先に進めない。しかし、彼らの道草によって地域情報が伝えられたといえますから、現在の道の駅やシーニックバイウエイの役割も果たしていたことになるのでしよう。目的の途中で手間取ってしまうのは今も昔もよくあることで、その都度、あせる・困る・笑うといった経験があります。ただし、緊急時の道草はいつの時代も不要です。

ちなみに、現代の「道草を食う」の意味合いには、道端の野草を食べる、美味しい野草の話も含まれると耳打ちされ、笑い飛ばしてよいのか納得してよいのか、困っています。

言葉は生き物で、時代とともに変化しています。新しく生まれるもの、逆に忘れ去られるもの。しかし、使わなくなったからといって失うには惜しいのも言葉。「道草を食う」もそのひとつで、登下校の行き帰り、遊びに夢中になって心配をかけたたり叱られたりしたものの、道草のおかげで身についたものは多かったように思います。自分が住むエリア、町内の人々、通学区域、お使いに行く店、約束ごとや仲間のことなど、暮

らしている地域を探検した結果、心の中に「自分の街」がしっかり形成されました。その根っこがあるから、いくつになっても子どもの頃の情景はあざやかによみがえり、懐かしく温かな気持ちになれるのだと思います。

「道草食わないで行きなさい」。

いまでも子どもたちは、こう声をかけられているのでしょうか？心情あふれる言葉の数々を次の世代も引き継いでくれるようにと願っています。

迷い道

通勤もドライブも、できれば行きと帰りは違う道を利用したいものです。たとえ迷ったとしても、新しい道が見つかったとワクワクします。

ある日、目的地までの道順も曖昧、地図も持たないまま、いつものように「何とかなる」と気楽に運転、ドライブに出ました。美味しいと評判のパンの店を目指します。札幌から岩見沢まで行き、そこから苫小牧方向に向かって走るとそのうち看板が出てくるだろう。ところが、行けども行けども見あたりません。目印を見過ごしているのでは、通り越してしまったのではとウロウロ。準備不足を棚に上げ、「観光客が迷ったら、北海道の印象が悪くなる」と文句もポロリ。結局、数キロの道のりを何回も往復し、「ダメなら出直す」と決断。時間を無駄にし、環境に負荷をかけてしまったと反省しつつ、寄り道。しっかり道草食って戻りました。そして、後日、再挑戦。地図を頼りに無事目的地へたどり着きました。が、そこにあった看板は「本日クローズ」…。

ベニバナトチノキ

ベニバナトチノキの花が咲く季節です。「この花を見ると祭りが近づいたと思う」。ある男性がこう話していたのを思い出します。ベニバナトチノキの赤い花は、6月15日の札幌まつり（北海道神宮例祭）と対をなす初夏の風物詩になっているそうです。

この道を知ったのは数年前。偶然通りかかって見た光景に驚きました。他より道路幅が広く、そのため両

側の街路樹は背が高く、枝は両手を広げたように伸びています。その木に赤い花がたくさん咲いているのです。大きくて濃い緑の葉が茂る中で、赤い花は密集し房状になって、上に向かって力強く咲いていました。初めて見る美しい光景にしばらく見とれ、その通りを行ったり来たり。これがベニバナトチノキとの出会いです。場所は札幌市中央区北4条西20丁目から西方向にかけての一角。時季がくれば、花を眺め散策する人、写真を撮る人、ひと時を楽しむ人たちとすれ違います。そして、花が散って木の根元に赤いじゅうたんが敷き詰められるとそれも美しく、やがて、散った花を掃いで集める人の姿に、美しい光景を見守る、地域の心配りも伝わってきます。

以来、毎年、開花が楽しみです。時には友人を誘ってお花見に。珍しい赤い花に誰もが驚き、私は「これは寄り道によって見つけた」と道草の効用を自慢？このことを番組で紹介したところ、旭川でも見られますとリスナーが教えてくれました。行かなくてはなりません。



ベニバナトチノキ／2008年6月撮影